

インド・サールナート訪問記

宮原 豊 (9 組)

11 月 27 日から 12 月 18 日まで、インド・バラナシ市のサールナートの初転法輪寺 (Mulagandha Kuti Vihara Temple = インド大菩提会) の釈尊一代記壁画の保全修復事業のため、インドへ行ってまいりました。

この壁画は 85 年前に、日本の技法により描かれたものですが、経年劣化したために、剥離止め、補彩色を施し、これで何十年かは永らえられたと思います。いずれ本格的な補修工事を要する日が来るとは思いますが、今回は民間ベースの募金とボランティアで対処したものです。

今後はこの壁画の美術的な価値に対する認識が深まり、日印両国の公的支援 (技術面と資金面で) が必要になってくると考えています。

西洋の一般的な壁画はフレスコ技法によるものですが、この壁画は野生司 (のうす) 香雪画伯が、インドの気候にも変色せずに耐えるように鉱物性顔料 (岩絵の具) を使った日本画の手法で描いたものです。

そこで、この保全修復には日本から技術者を派遣して実行する以外にないと判断して、東京藝大の美術品修復専門の教授の指導を受け、京都の仏教美術補修専門業者の手により保全修復を施しました。

3 年前の 2019 年に三分の一を実施、その後コロナ禍で 2 年延期、今回残り三分の二を終わらせ、12 月 16 日にはインド側の主催する落慶式 (竣工式) が盛大に実施されました。プロジェクトを立ち上げてから十数年を経て、関係者にとっては大願成就となりました。

施主のインド大菩提会にも大満足いただけたようで、式当日は日印双方から錚々たる方々が集まりました。日本からは、永平寺から多数の僧が参列 (宗派に関係ない活動でしたが、永平寺には格別の賛同をいただけてきました)、仏教伝道協会幹部、香雪直系の孫夫妻や関係団体の方々が出席。

インド側からも中央政府外務省傘下の ICCR (インド文化交流評議会) 会長や学会、宗教界指導者の参加を得て、日印文化交流にとっても記念すべき事業であったと再認識する場となりました。

私個人も、7、8 年の間、協力してきたプロジェクトが完結して、ほっと胸をなでおろしています。

さて、3 時間の時差は微妙で、1 週間ほどかけてようやく普通の状態に戻ったと思ったら、もはや年の暮れです。

(2022 年 12 月 29 日記)

壁画の修復工事の様子



関係者と仏像を囲んで、
前列右から二人目筆者



記念品を受け取る筆者

以上